

文脈指示の「コ」と「ソ」の使い分け

三枝 令子

要旨

本稿では、経済文献の数量的データと個々の事例の観察をもとに、文脈指示の「コ」「ソ」について、どちらかしか言えないという例を中心にその使い分けをできるだけ具体的に考えた。コ系は、書き言葉の中でも現場指示に準じた用法を持つので、今述べているときや図表の指示にはコ系を用いる。また、文脈指示用法としては、それまでに述べてきたことをまとめる働きを持つ。ソ系のうち、「その」は、代行指示の働きをすることが多い。「それ」は、同一語の繰り返しに用いられるほか、「それは」は、問題提起、質問に対する答えに用いられることが多い。

キーワード 指示詞、文脈指示、コ系、ソ系

0. はじめに

「これ」「それ」「この」「その」に代表されるコ系、ソ系の指示語は文章の中で使われる頻度が非常に高い。しかしながら、日本語学習者にとっては母語の影響もあり、また、日本語だけで考えてもいわゆる現場指示と文脈指示の用法には異なる面があり、その使い分けはむずかしい。言い換えが効く場合も多く、それがまた問題を複雑にしているが、基本的には、話し手のことがらに対する立場が示され、言い換えが効くからと言って、どちらを使っても同じということではない。本稿では、経済文献の数量的データと個々の事例の観察をもとに、文脈指示の「コ」「ソ」について、どちらかしか言えないという例を中心にその使い分けをできるだけ具体的に考え、学習者が日本語で文を書くときの参考となり得る指針を提案したい。

1. コ系とソ系の使用頻度

本稿では数量的データとして、経済文献5冊のデータ16000文を用いる*1。次の表は、コ系、ソ系の使用頻度を示したものである。

*1 ここで経済文献というのは、次の五冊を指す。()内は略称。

(近経): 新聞陽一／新飯田宏／根岸隆著『近代経済学[新版]』有斐閣大学双書

(入マ): 中谷巖著『入門マクロ経済学[第2版]』日本評論社

(日近): 中村政則編『日本の近代化と資本主義[初版]』東京大学出版会

(ゼミ): 日本経済新聞社編『ゼミナール日本経済入門[第8版]』日本経済新聞社

(経済史): 堀江英一著『経済史入門[第3版]』有斐閣双書

この他に、以下の資料を用いた。

(谷口 96): 谷口晋吉「18世紀後半ベンガル農業社会の貨幣化と農村市場に関する一試論」一橋大学一橋学会編集『一橋論叢』1996年12月号(日本評論社)

表1 コ系とソ系の使用頻度

この	2216	その	1434
これ	937	それ	1025
ここ	261	そこ	180
これら	260	それら	64
こうして／した	248	そうして／した	36
こちら	4	そちら	0
計	3926 (59 %)		2739 (41 %)
総計			6665

表1で、「その」「それ」の数からは、「そのもの、それぞれ、それゆえ、それにもかかわらず、それとも」等の、対応する「この」「これ」の用法が明らかにない言葉は省いてある。ただし、ソ系の一語化が進んでいると思われるものでも、形の上で対応するコ系があり得るものは、上記の数に含めた。たとえば、「それほど、それでは、それだけ、それでも、それから」等。また、「ア」系は、「あのニュートンでさえ」「あの松下電器産業が」といった、久野(1973)で述べられている「その代名詞の実世界における指示対象を話し手・聞き手ともによく知っている場合」*²に限られており、かつ全体で6例しか現れなかったため、ここでは扱わない*³。上の表から、コ系がソ系に比べてかなり多く使われていることがわかる。そこで、まず、次のような使用原則をたてることができる。

原則1：ソ系しか使えない場合以外は、コ系を用いた方が間違う可能性は低い。

2. ソ系ではなく、コ系を使う場合

書き手が書いているとき、読み手が読んでいるそのときは、書き手、読み手それぞれにとってそれが「今」という時になる。そこで、論じているそのときを指示する場合には、現場指示用法に準じてコ系を用いる。その指示対象は、大きく次の三つに分けられる。

* 2 久野(1973)『日本文法研究』大修館書店 185-199 頁

* 3 経済文献五冊には、絶対指示の用法、後方文脈指示の「こ」の用法は見られなかったため、これも取り上げていない。

- 1 「今」という時を述べる。
- 2 今論じていることがらを指示する。
- 3 図表の指示。

1の「今」という時を述べるというのは、「このとき、この時期・この期間、この年の12月」等の表現を指す。表3に見るように、時を表す語句は「この」と共起することが多い。

表2 「この」「その」と時を表す語句との共起頻度

	とき	時期	間	年	期間
この	141	31	22	15	13
その	31	0	3	2	3

1. いま利子率がある非常に低い水準にあるとしよう。すでに前章で明らかのように、この（?その）とき証券価格は非常に高い。（近経）

2. この年にはもうひとつ、日米間の経済力の勢いの違いを示す事件が起こった。

（ゼミ）

こうした現場指示に準じた時の用法は「これ」や「ここ」にもある。すなわち、「これまで」「これから」は、「今まで」「今から」と言い換えることができ、また、「ここで」は「今」に近い。

3. 私たちはこれまで、物価が経済社会にどのような影響を与えるか、物価の理論、物価対策にはどのようなものがあるか、などについて勉強してきた。（ゼミ）

4. すでに「1 進む環境破壊」で指摘したように、産業革命以降の産業技術の発展を支えた科学はニュートン力学を中心とする古典物理学だった。それに対し、これから二十一世紀にかけての産業技術を支える科学は二十世紀初頭に確立した量子力学を中心とする現代物理学である。（ゼミ）

5. ここで日本経済の特徴的な問題として取り上げるのは、次の四つである。（近経）
なお、次の例6に見るように「ここでは」は、「ここで」に比べて、「ほかの箇所ではなくここで」という意味合いが強くなる。

6. いったいこの急速な成長を可能にした要因は何であったかは、それ自体一書を草するに足る問題であるが、ここでは、日本経済の発展方向を経済史的に説明しつつ、簡単に問題点を指摘しておこう。（近経）

さらに、今論じていることがらを指示する場合にもコ系が用いられる。たとえば、次の例の「この点」の他、「この問題、このこと、この事実・現実、この方法・仮定・考え方、この場合、この区分」等。

7. 戦後は、これに代わる新しい国家目標、課題の設定が必要である。表1-3では

この目標として「開かれた科学技術国家の構築」と書いてある。この（×その）点については若干の説明が必要であろう。（ゼミ）

8. 貨幣が導入されると、交換は大幅に効率化されます。パンを売ってブドウ酒（その他リンゴやチーズなど複数の財貨でも、この（×その）場合いっこうにかまわないが）を手にいれたい人は、さしあたり、誰にでもパンを売って貨幣を受けとればよいのです。（入マ）

金水・田窪（1990）は、こうした用法を「解説のコ」「視点遊離のコ」と呼び、「解説のコは、発話の現場に見えない黒板が導入され、話し手が見えない指さしを行っている、と考えられる。」「（視点遊離のコ）は、小説や体験談など、時間の経過とともに出来事が推移していくような文章にのみ現れるもので、このような文章では、現場や聞き手などに影響されることなく、話し手の視点を自由に話中の登場人物に近付けることができる。」*4と説明している。金水・田窪では二つの用法に分けているけれども、指示対象が「問題」のようにある大きさを持つ場合、それを追って指示するには視点の移動が必要で、その意味では、この二つの用法はどちらも現場指示であるが故の基本的な性格と言えよう。

また、「この」が「節、章、図、表、例」といった語と結びつくときも、「その」では言い換えられない。

9. 前章において経済、経済問題とは何かを説明し、この（×その）章においては経済学とは何かを論じた。（近経）

10. 以上のプロセスを図式的に示したのが第 1-1 図である。読者は後に詳述される経済循環図式の説明の後で、いま一度この（×その）図式を参照すべきである。

（近経）

これも、目の前のものを指す現場指示の用法に準じていると言える。そこで、次のような原則がたてられるだろう。

原則 2：書いている「今」を表すには、「このとき、この時期、これまで、これから」とコ系を用いる。また、今論じていることがらや論文中の「節、章、図、表、例」等の指示には「この」を用いる。

次に、「コ」「ソ」の中で使用頻度の高い「この」「その」の使い方を見ることにする。

3. 「この」と「その」の使い分け

3. 1 「その」ではなく、「この」を使わなければならない時

3 章で述べた現場指示に準じた用法以外に、次のような場合に「その」ではなく、「この」を用いる。

* 4 金水・田窪(1990) 104-105 頁

(1) まとめの働きをする「こ」

一般に、文脈指示を担うのはソ系と考えられているが、コ系にも文脈指示の用法はある。それは、次の「このように」の例に端的に示される、前に述べたことをまとめる働きである。

11. 1950年代後半から60年代にかけて、重化学工業路線をひた走った日本経済は、水俣病、四日市ぜんそくなどの産業公害を全国各地で発生させ、大きな社会問題を引き起こした。このため、政府は公害防止のための各種法律をつくり、企業活動を厳しく監視したことなどは既に「I 日本経済 TODAY」で指摘した。

このように、環境行政が厳しくなる中で、企業はどのような対応をしたのだろうか。(ゼミ)

12. 一方、ドイツも旧東ドイツの再建という最優先課題を抱えているため、地球環境の保護・保全といったグローバルな視点からの技術開発に積極的に取り組める状態にはない。現在の EC は資金力のあるドイツが本気で動き出さなければ、このような課題はなかなか前進しない。

このように見てくると、これから世界が必要とする科学技術の研究・開発に一番積極的に取り組みやすい条件を備えている国は日本だと言ってよいだろう。

(ゼミ)

「このように」には、「コーヒーを飲むとき砂糖はいっしょに使用される。このように一つの消費行動について必ずいっしょに使用される財は相互に補完的な関係にあるといわれ、それらを補完財と呼ぶ。(近経)」という例のように、前に述べたことを指す指示の働きもあるが、上の例 11、12 のように、それ以前に述べたことをまとめる意味合いで用いられることが多い。この使い方は、意識的に導入しないと、気づかれにくい。こうした働きが「その」にないことは、表 2 の数量的データからもわかる。

表 3 「{こ／そ} のような／ように、{こ／そ} うした／うして」の頻度

	ような	ように		した	して
この	335	153	こう	136	112
その	68	2	そう	26	10

ちなみに、「そのような」の使われ方はどういうものかと言えば、次のように、単に前の語句を受ける用法である。

13. 他のももの価格があがるとき同時に値上げすることを俗に“便乗値上げ”などというが、実際にはそのようなことはあまりない。(近経)

3. 2 「この」ではなく、「その」を使わなければならないとき

(1) 代行指示用法

「その」を使わなければならない場合として、まず、代行指示の用法があげられる。これは、「その」によって先行する文の語句を受け、「その」に後続する名詞でその語句の属性を取り立てるもので、「その」の使い方の中でもっとも多い。ちょうど英語の its, his, her, their という所有代名詞に当たる働きをしている。

14. マルクス経済学は社会の歴史的な発展の解明をこころみるものである。近代経済学が条件とするものの多くをその（×この）分析の対象の中に含んでいる。

{マルクス経済学の分析の対象}

(近経)

15. 景気変動についての理論を知っていれば、まだ知らない国の景気変動や将来の景気変動についてもその（×この）本質的な性質をおしはかることができるであろう。{景気変動の本質的な性質}

(近経)

このとき、「その」に後続する語句を、その語句の性質から、大きく次の三つに分類することができる。

- 1 「前、後、直後、一方、一つ、一部、分」といった相対的な意味を持つ名詞。
 - 2 「結果、理由、影響、効果、特徴」といった属性を表す名詞。
 - 3 「意味」という同格を表す名詞。
16. フリードマンの「選択の自由」には、貨幣にまつわるおもしろい話がたくさん出てくる。その一つに“たばこの話”がある。(ゼミ)
17. さらに、1985 年 9 月のプラザ合意の結果、大幅な円高が進行し、またほぼ時を同じくして原油価格が暴落しましたが、その結果、輸入品価格は、1 年後の 1986 年には対前年比で 40 % 近くも低下しています。(入マ)
18. 環境政策としての経済的手段は、現在まだ実験段階のものが多く、その効果については九〇年代の各国の経験に負う部分が大きい。(ゼミ)
19. 来期以降の GNP を予想するとき、もっとも重要な役割をになうのは今期と近い過去の GNP であろう。その意味で、将来に関する予想といえども、過去から自由ではありえない。(近経)

上の例を見てもわかるように、これらの名詞はそれが含まれる文において副詞節を作ることが多い。先の三分類であげた名詞と「この」「その」との共起頻度を見てみよう。

表 4 「この」「その」と共起する名詞

	総数	結果	後（ご）	意味	理由	中	分	効果・効用	特徴・特質
その	1434	80	59	30	28	25	22	12	12
この	2216	28	0	22	0	14	5	0	0

こうした名詞を「この」で受けることも不可能ではないが、数の上からは「その」が多

い。「結果」は、「その」ともっとも多く共起する語で、「その結果」は、固定表現として扱ってもいいだろう。庵(1997b)は、こうした名詞の性格を「1項名詞」「0項名詞」という概念を使って厳密に規定している。「1項名詞」とは、「著書」「愛人」のようなノ格を必ず必要とする名詞、「0項名詞」は、「本」「女性」のようにノ格を必ずしも必要としない名詞を指す。そして、代行指示が可能なのは、被修飾名詞が1項名詞のときに限られるという。

原則3：英語の所有代名詞に当たる働き、代行指示の用法には、「その」を用いる。

なお、「その結果」は、定まった表現と考えてよい。

(2) 接続詞用法

(1) の代行指示用法のところで、「その」に続く名詞は、相対的な抽象名詞が多いことを見た。これは、「この」が、現場指示から出発して、具体的な意味を持つ名詞を受けるのと対照的である。ソ系のこうした働きを正保(1981)は、「事実ではない、つまり仮定や、空想に基づいた叙述内容を受ける際には「ソ」を使用するのが普通である」*5と述べている。例を見てみよう。

20. さて、この問題に答えるためには少なくとも2つのデータが用意されなければならない。1つはその(×この)家計にとって支出可能な貨幣額によって開かれている選択可能な範囲を決めるためのデータである。(近経)

21. 花形産業がいつの間にか時代遅れになって衰退してしまうのは珍しいことではない産業にも企業にもライフサイクルがある。その(×この)産業が生まれてしばらくの幼年期、そして伸び盛りの成長期、成熟期を経て老齢化していく。(ゼミ)

こうした例が仮定の叙述内容を受ける「その」の典型といえるだろう。いずれも「ある」に言い換え可能で、「この」には言い換えられない。次の22は「それ」の例だが、前文が野田(1989)の「真性モダリティを持たない文」のため、これも仮定上の観念的意味合いが強い。

22. 一杯目のうまさはずっと続く。それが「辛口」の大きな特徴の一つです。

(電車内の広告から)

ソ系のこうした仮定の叙述を受ける性質は、接続詞の語形にも反映される。次の例に見るように、接続詞にはソ系の語が多く含まれている。

* 5 正保(1981) 106 頁

表5 ソ系を含む接続詞

それに*、それゆえ、それで*、それでは*、それでも*、それなら*、
 それにもかかわらず、それにしては、それにしても、それなのに、そのくせ、
 それから*、そればかりでなく*、そればかりか、それどころか、それはさておき、
 それはそうと、それはそれとして、それと*、それとも、そうすると*、それも*、
 そのため、そのうち*、そのうえ*、そこで*、そうして*

*印は、次の例のようにコソの意味的な対応が一方でありながら、コソの違いに対応しない固定した接続詞としての働き、意味を持つ語である。

23. 本節では、まず、前節までの考察を踏まえながら 18 世紀後半ベンガル地方の貨幣と財の循環の基本構造のモデルを提示し、ついで、そこで触れ得ない若干の重要な論点を補うことにしたい。(谷口 96) (指示対象を持ち、コソの意味的な対応がある。)
 24. 経済学においては航空力学におけるように目にみえる具象的な模型を、つくるわけにはいかない。その対象が人間の社会であるから、そのような模型の社会をつくらせてさまざまな条件のもとで実験してみるわけにはいかないからである。そこで抽象的な理論模型ですまさなければならない。(近経) (理由を表す接続詞用法)
 25. 全盛時の恐竜は大きいものになると、体長二、三〇メートルもあった。この地球上最強の動物といわれる恐竜が滅亡した理由はいったいどこにあったのだろうか。全盛時、地球は暖かく、植物は生い茂っていた。恐竜の食べ物も豊富だった。それ(×これ) がしだいに気候が変化し、それにつれて植物も変わっていった。恐竜の食べ物も徐々に少なくなっていく。仲間同士の食い合いが生まれ、恐竜の卵を食べる動物さえ現れた。そして、ついに絶滅した。(ゼミ) (逆接の接続詞用法)
- 同じソ系の語でも、それが文脈指示のものか、すなわち、指示の対象を持つか、接続詞か学習者は見分ける必要がある。こうした語の中で特に注意を要するのは、上の「そこで」「それが」のように、語形からは意味が取りにくい語句である。こうした接続詞として、「そこで」「それが」の他に、「それで (理由)」「それに (累加)」、また、副詞で同様な例として「それほど」「そのうち (近日の意味)」等があげられる。

3. 3 「この」「その」の限定指示用法

「この」「その」には、その数は少ないが、次の例に見るような指示詞が前の語句をそのまま受ける「限定指示」の用法がある。

26. 「福祉の時代」といってもかつての「ゆりかごから墓場まで」といった” 甘え” を許す福祉とはかなり違ったものになるはずだ。かつての福祉社会はその (この) 甘えを許したがゆえに失敗した。(ゼミ)

27. 日本人は衣と食は十分でも、住はまだ欧米に比べれば貧しい。東京に比べ、地方の近代化はまだ遅れ、過疎に泣いている地域もある。その(?この)東京にしても、超過密という”東京プロブレム”にあえいでいる。(ゼミ)

限定指示の用法においては、「この」「その」のどちらでもいい場合が多い。その点について、林(1973)は、「こういう場合、往々にして「この」でも「その」でも、どちらでも同じように通用する。それは、これらの指示語の役目が、単に、指定して内包を外延に変えることだけで果たされ、近称で指示するか中称で指示するかは、たいして問題ではないからである。英語で言えば、おそらくこの場合、「この」でも、this を用いるまでのことはなく、the と指定するだけで充分なのではないかと思う。」*6と述べている。

以上、本節では「この」「その」の使い分けを見た。「この」には、一つは現場指示に準じた用法、二つ目に文脈指示用法として、前に述べたことがらをまとめる働きがあった。一方、「その」は、専ら文脈指示に用いられ、特に前に述べた特定の語句の属性を取り立てる代行指示の用法がその中心である。庵(1997b)は、文脈指示に「結束性」という概念を導入し、「この」「その」等の指示詞が用いられる場合、それは、先行する文に解釈がゆだねられており、文連続全体でテキストを構成すると考える。そして、「この」「その」「ゼロ(指示詞を用いない場合)」の代行指示、限定指示(庵の用語では「指定指示)」の使い方をこの「結束性」の観点から分析した。結論として「この」「その」の機能について庵は、先行詞のテキストのトピックとの関連性が高いときは「この」を用い、テキストの意味(前文中の語句を受ける場合)の付与があるとき「その」を用いる、と述べている。

4. 「これ」「それ」の使い分け

4. 1 「これ」「それ」の使い分け

3節では、「この」「その」の使い分けを見たが、「これ」「それ」については、連体詞の「この」「その」とは異なり、先行文との照応関係は今少し漠然としたものにならざるを得ない。まず用例を見てみよう。

28. 現代社会における経済問題の多くは、価格機構により解決されている。これは資本主義社会においてそうであるだけでなく、少なくとも部分的には社会主義諸国においてもそうなのである。(近経)

(これ=経済問題の多くが価格機構により解決されていること)

29. 人類をふくめた生物は、単なる物質から構成され、単なる物質から発展したものであるが、それは単なる物質とちがって自律的な物質代謝機能をいとなんでいる。

(経済史)(それ=人類を含めた生物)

* 6 林(1973) 128頁

30. しかし、国内における金融資産は必ず負債と相殺されるから、国民資本には入らない。これが国内の金融資産と対外資産との大きな相違である。（近経）

（これ＝金融資産が国民資本に入らないこと）

31. このような現実のとらえかたは、たとえば、映画のフィルムに似ている。フィルムの一駒一駒は現実の静止した像であるが、それが少しずつ変化することにより現実の動きが再現されるのである。（近経）（それ＝一駒一駒）

こうしてみると、「これ」「それ」の使い分けも、コ系、ソ系という点では、「この」「その」の用法と異なるものではない。ただ、「この」「その」は、続く名詞によって先行文との関係が明らかになるのに対し、「これ」「それ」の場合は、続く助詞が文の中でのあり方を規定している*7。そこで、次に助詞を伴う「これ」「それ」について見てみよう。

4. 2 「これが」と「それが」の使われ方

「これ」「それ」と助詞の結びつきの中で、最も使い分けがはっきりしているのは、助詞が「が」の場合である。「これが」は、「これが……である。」という文型で、「これ」と「述語名詞」が同じであるということを表す“指定文”で用いられることが非常に多い。先の 30) や次の 32) の例がそれに当たる。

32. モノやサービスの供給者である企業が市場支配力を強めてくると、次にはできるだけ利益を多くするために価格を吊り下げ始める。これが管理価格インフレだ。

（ゼミ）

このほかの用法として数は多くないが、逆接文を導く「これが」がある。次の例のように、指示するものが数値の場合にこの用法が多い。

33. いまストック価格の代表として日経平均株価をとると、81 年の平均は 7511 円だった。これが 89 年では 3 万 4043 円。4.53 倍にも膨らんでいる。（ゼミ）

一方、「それが」にも逆接用法はあるが、「それが」は、先の 31) や次の例のように従属文の主語として用いられることが多い。

34. ロシアでは農奴解放で大部分の農民は分与地を受け取ったが、土地の用益権をあたえられただけで、それが自分の所有地となるためには地主に対して土地購入代金を払わねばならなかった。（日近）

* 7 「これ」「それ」と助詞の共起数は、次の通りである。

	これ	それ
は	226	224
に	187	169
を	136	149
が	101	119
計	937	1025

そこで、「これが」「それが」については、次のような原則を立てることができる。

原則4：「これが」は、指定文の、「それが」は従属文の主語に専ら用いられる。

4. 3 「これ〔は／を／に〕」「それ〔は／を／に〕」の使われ方

次に「これは」「それは」の使い方を見てみよう。この場合は、「が」の時ほど使い分けは明かでない。まず、「これは」を用いる場合としては、次のようなものがあげられる。

- 1 図式の説明。
- 2 引用文の指示。
- 3 理由、原因の説明や解説。
- 4 名付け、定義。

次が、上の1～3に対応する例である。

35. したがって、消費者余剰は、第7-10図においては、面積 pAD で表される。すなわち、需要曲線と価格線とにより囲まれた配分の面積である。これは、交換により発生する消費者の効用の増加を、金額で表したものである。(近経)
36. 平家物語は言う。「おごれるものは久しからず。盛者必衰の理を著す」と。これは産業にもあてはまる。(ゼミ)
37. 現金通貨(日本銀行券)の供給は中央銀行に限られている。これは銀行券の発行権が中央銀行である日本銀行に一任されているからである。(近経)

上の四つの用法のうち、1と2は、「この」にも見られる現場指示の用法に準じたものである。3の「理由、原因の説明や解説」は、コ系がまとめの働きを持つことによると考えられる。4の「名付け、定義」用法は、次の例38)のように「これは」にもあるが、「これを」のときに顕著に見られる。これは、名付けの動詞「言う、呼ぶ」が対象にヲ格を取るためである。この用法もコ系の現場指示に準じたものと言える。

38. このように経済全体の動きを集計量のあいだの関係を通じて分析することから、これ(？それ)は巨視的分析と呼ばれるのである。(近経)
39. ただ公共投資といっても国がすべてを支出するわけではない。おおまかに言うと、公共投資の60%を国が支出し、40%を地方が負担する(これ(それ)を地方単独事業と言う)というのがここ数年の傾向である。(ゼミ)

このコ系の意味・働きは、助詞が「に」の場合の使い方にも明かである。次の表6から二格は助詞相当句との共起が多いことがわかる。中でも「これに対し」類の割合の高いことが目に付く。対比の効果は、今日の前にあるものに対立させるときに際立つからであろう。

表6 「これに」「それに」と助詞相当句の頻度

これに	それに
これに 42	それに 73
これには／も 22	それには 5
これに＋助詞相当句 123 { 対し／対して／対する 67 より／よって／よると 23 その他 39 }	それに＋助詞相当句 72 { より／よって／よると／よる 20 伴い／伴って 10 基づく／基づいた 9 対し／対して／対する 9 応じて 8 その他 16 }
計 187	計 150

一方、「それは」の用法は、つぎのように分けられる。

- 1 問題提起、質問に対する答え。
- 2 事態の言い換え。
- 3 叙述文。

次の40) 41) は上の1の例、42) は上の2の例、43) は、3の例である。

40. それでは、ケインズの挑戦したことはどのようなことだったのでしょか。一言でいえば、それは古典派が主張する「市場万能主義」を排し、「国家による総需要管理」の必要性を説くということでした。（入マ）
41. 「何をどれだけ」「どのように」生産するかの問題が経済社会で解決されたとして、いま1つ基本的な問題として解決を迫られる問題が残っている。それは、生産された財貨・サービスは経済社会を構成する各個人のあいだにどのように分配されるべきか、いいかえれば、財貨・サービスは「誰のために」生産されるべきかの問題である。（近経）
42. しかし、このようなメニュー・コスト理論に対しては厳しい批判がよせられました。それは、メニュー・コストはたとえ存在するとしてもきわめて小さいのではないか、社会全体が不況と失業に苦しんで大きな社会的費用を負担しているという現実を、小さなメニュー・コストの存在ですべて説明しようとするのは無理ではないか、という批判です。（入マ）
43. 明治維新は、一八五三（嘉永六）年のペリー来航から一八九〇（明治二三）年の帝国議会開設までの歴史過程をさすが、それは復古、改革、革命の三側面をもっており、どこに重点を置くかによって明治維新の評価は異なってくる。（日近）

ソ系は、先行文の特定の事項を指し示すので、先行文の特定の事項を説明したり、言い換えたりする文が続く。また、問題提起、質問に対する答えを導くのは、それが完全に観念的なことがらだからである。

原則5：問題提起、質問の答えの導入には、「それ」を用いる。

4. 4「それ」の同一語の繰り返し用法

ソ系は、観念的なことがらを指示するのに用いられるが、この典型と言える例は、次の例に見るような「これ」にはない「それ」だけが持つ同一語の繰り返し用法である。

44. 昭和 30 年のエンゲル係数は 49、昭和 45 年のそれは 34 となっている。(近経)

45. 現実の経済の動きを説明しようとする経済理論の方法は、たとえば天体の動きを説明しようとする天文学など自然科学のそれと同じである。(近経)

原則6：同一語の繰り返しには「それ」を用いる。

5. まとめ

以上述べてきたことを簡単にまとめると、次のようになる。

1) 「この」「その」の使い分け

「この」…… 1. 図表、今述べている時点、ことがらを指す。

2. 先行の叙述をまとめる働きをする。

「その」…… 1. 「その」が先行の語句を受け、「その」に続く名詞でその属性等を取り立てる代行指示の働きをする。「その結果」が典型例である。

2) 「これ」「それ」の使い分け

「これ」…… 1. 「これが」は、「これが、他のものではない……だ。」という文型の指定文に多く用いられる。

2. 「これは」は、先行文の理由・原因を説明するときに用いられる。

3. 「これを」は、動詞「言う、呼ぶ」とともに、名付け、定義に用いられる。

4. 「これに」は、「これに対して」の形で用いられることが多い。

「それ」…… 1. 「それが」は、従属文の主語に多く用いられる。

2. 「それは」は、問題提起、質問に対する答えに用いられる。

3. 「それ」は、同一語の繰り返しを避ける場合に用いられる。

【参考文献】

- 庵 功雄(1997a)「「は」と「が」の選択に関わる一要因－定情報名詞句のマーカーの選択要因との相関からの考察－」『国語学』188
- ―――(1997b)「日本語テキストの結束性の研究－指示表現と名詞の機能を中心に－」未公開博士論文
大阪大学
- 金水 敏・田窪行則(1990)「談話管理理論からみた日本語の指示詞」『認知科学の発展』第3巻 講談社
サイエンティフィック
- 正保 勇(1981)「コソアの体系」『日本語教育指導参考書8 日本語の指示詞』国立国語研究所
- 杉戸清樹・塚田実知代(1991)「言語行動を説明する言語表現－専門的文章の場合－」『国立国語研究所
103 研究報告集12』
- 竹田完次(1997)「文章中の文脈を指示するコレとソレの使い分け」計量国語学会第41回大会口頭発表資
料
- 野田尚史(1989)「真性モダリティを持たない文」『日本語のモダリティ』くろしお出版
- 林 四郎(1972)「指示連体詞「この」「その」の働きと前後関係」『電子計算機による国語研究4』国立国
語研究所報告46
- ―――(1973)『文の姿勢の研究』明治図書
- 堀口和吉(1990)「指示詞コ・ソ・アの表現」『日本語学』9-3